今治歴史散歩

大　成　経　凡

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第39回は、小部(おべ)湾に所在する２基の海中鳥居を紹介し、その周辺地区のこぼれ話を歴史散歩したいと思います。

第39回　小部湾の海中鳥居　～御崎神社と龍神社～

●歴史地理的にみた小部(おべ)湾

御崎神社の一の鳥居（波方町宮崎地区）

高縄半島の先端・今治市波方町の西部に位置する集落が小部地区で、これに臨む同町宮崎地区と大西町九王(くおう)地区に囲まれた入り江が小部湾となります。明治30年代に来島海峡に３つの航路標識「中渡島灯台」「コノ瀬灯標」「大浜灯台」が整備されるまでは、夜間航行を危険と感じる外国籍の軍艦はここを錨泊地(びょうはくち)としたことでも知られています。夕陽が美しい鴨池海岸もこの中にあり、沖には斎灘(いつきなだ)が広がっています。

ここに漁村集落が形成されたのは、江戸時代初期に加藤嘉明(よしあき)が家臣の木村新兵衛に小部湾周辺の漁業権を与えたことに始まります。新兵衛は淡路島出身で、豊臣政権下の文禄・慶長の役では水軍として活躍。同地区に木村姓が多いのは、その開拓の祖・新兵衛にあやかってのことのようです。藩政時代は松山領最大のイリコの上納高を誇り、請負人の菊川長五郎は藩から褒状を賜っています。

●御崎神社のヤマモモのこみち

御崎神社のヤマモモのこみち（2025年５月撮影）

宮崎の地名は、平安時代の史料『三代実録』に登場します。そこには宮崎村を拠点とする海賊が、867年に周辺海域を通航する船の積み荷を奪うなどの行為が記され、当時の朝廷は取締りに手を焼いています。来島海峡の地の利を考えると、都向けの年貢や特産物が略奪されたのでしょう。

その宮崎地区の氏神が御崎神社で、眺望のきいた烏鼻(からすばな)の丘陵上にあり、斎灘をにらむように立地しています。かつては牛馬の神様として、近郷村々の農家から信仰されました。麓の集落

から社殿までは500mほどの参道が延び、鳥居は全部で３基あります。一の鳥居は海中にあって、刻まれた銘文から、大正14（1925）年１月15日に米国在留の三宅岩吉が帰朝記念に造立したことが分かります。同地区には三宅姓と丹下姓が多いことから、岩吉が異国で財をなし、故郷に錦を飾ったことがうかがえます。

龍神社の海中鳥居（2025年５月／日浅敬治氏撮影）

この海中鳥居から社殿まで、現在は舗装された県道が三の鳥居まで延びています。一方、未舗装の参道入口付近には、天保９（1838）年に九王村の石工・村田豊助が手がけた狛犬が参詣者を出迎えてくれます。参道にはヤマモモの叢林が形成され、まるでジブリ映画〝トトロの森〟のような幻想的光景です。梅雨時期、たわわに実った果実が参道を赤く染めます。

解説板によると、同所にヤマモモの樹が多いのは、その樹皮が漁網になくてはならない染料だったことに由来します。海岸で煮て網を染め上げ、砂浜で乾燥させて使用されました。氏神様の分け御霊が網に宿ることで、豊漁祈願につながったのでしょう。

●九王龍神社の獅子舞芸能

九王の地名の由来は、一説に神武天皇東征の神話が関係するともいわれています。荒天による海難を避けようと一行は同所に船を着け、龍神を祀ったところ時化は鎮まったようです。後に、その八大龍王（八柱の龍神の総称）に神武天皇を加えた九つの王を祀ることからそう名づけられたとか。『三代実録』には、870年に朝廷から同社へ官位が授けられたことが記され、後に雨乞いの祈祷所として信仰を集めたようです。そんな九王地区発展の基礎は、江戸時代初期に同所へ移り住んだ安芸の浪人・檜垣五郎右衛門の新田開発に始まります。

今日の九王龍神社は、獅子舞芸能の演目「船上の継ぎ獅子」が有名です。これは、５月第３日曜の祭礼の中で披露されます。宮出しをした神輿が船で対岸へ渡御する間、海上をお供しながら船上で立ち芸を演じるのです。そのルート上に海中鳥居は立ち、明治33（1900）年に造立されたことが銘に刻まれています。

船上の継ぎ獅子は、九王の海岸から観賞できます。そこはかつて当地方有数の海水浴場で賑わいました。その影響で昭和36～41（1961～66）年の夏季に限り、国鉄波方駅と大西駅の間には臨時の九王駅が地蔵堂前に開設されました。気動車（ディーゼル車）が１日12本停車したようで、ちょうど車両が蒸気機関車から気動車に移行する時期でもありました。

船上の継ぎ獅子（2025年５月／日浅敬治氏撮影）

昭和35（1960）年３月１日に開業した波方駅は気動車対応の駅で、同じ日、波方村から波方町に町制施行がなされ、地名の呼称が変わりました。